

第2章 くらしと産業

第1節 第1次産業と地域



1 畑作の盛んな地域

順位	じゃがいも			レタス		
	市町名	面積(ha)	割合(%)	市町名	面積(ha)	割合(%)
1	雲仙市	1,360	42.6	雲仙市	337	35.9
2	南島原市	922	28.9	島原市	141	15.0
3	諫早市	599	18.8	諫早市	113	12.0
	その他	309	9.7	その他	349	37.1
	合計	3,190	100.0	合計	940	100.0

長崎県のじゃがいもとレタスの作付け面積(令和4年)
(農林水産省 作物統計調査より)

県内最大の農業地帯である島原半島では、じゃがいも、レタス、だいこん、はくさい、いちご、トマトなどが栽培されている。

なかでも戦後作り始められたじゃがいもは、1970(昭和45)年ごろから

作付け面積が増え、現在では、トマトやレタスとともにこの地域のおもな農作物となっている。そこで、じゃがいもの生産についてJ A島原雲仙に聞き取り調査をした結果、次のことがわかった。

- じゃがいもは、植付から収穫まで3~4か月程度かかる。また、さまざまな時期に収穫できるようトンネル栽培、マルチ栽培(P38参照)という方法がとられている。
- 8月から10月以外ほぼ一年中収穫している。
- 収穫されたじゃがいもは、J Aを通じておもに東京や大阪などの市場やスーパーにトラックなどで直接出荷されている。

今回調査してわかったことのうち「8月から10月以外ほぼ一年中収穫している。」ということについて、「なぜ、8月から10月はじゃがいもを収穫しないのだろうか。」という疑問が生まれてきた。そこで、このことについて次のような予想を考えてみた。

〈予想〉

- ①島原半島の気候は、6月から7月がじゃがいもの生育時期としては不適當ではないのか。
- ②8月から10月は、他の産地で多くのじゃがいもが収穫されるため値段が安くなり、利益が少なくなることからこの時期には収穫しないように栽培しているのではないか。

そこで、これらの予想を確かめてみることにした。

①について、じゃがいもの生育条件を県庁の農産園芸課に聞いてみたところ、じゃがいもの生育に適した平均気温は、10~23℃であることがわかった。気象庁のホームページで島原半島の気温と降水量を調べてみると次のような結果であった。

島原 気温と降水量(令和4年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(℃)	7.0	6.2	12.4	16.5	20.2	24.4	28.2	28.7	26.1	19.9	16.5	7.5
積算降水量(mm)	74.0	20.0	168.0	206.5	108.5	299.5	283.5	205.0	139.5	40.5	63.5	38.0

(気象庁 気象統計資料より)

みんなで考えてみよう!

島原半島におけるじゃがいもづくりについて調べてみよう。

MEMO

このことから、島原でじゃがいもを8月から10月に収穫しようとするれば、6月から9月が生育時期に当たり、平均気温は23℃を上まわることから、「6月から9月はじゃがいもの生育時期としては不適当である。」ということがわかった。

じゃがいもの収穫量(令和4年)

順位	都道府県名	収穫量(t)	割合(%)
1	北海道	1,819,000	79.7
2	鹿児島	97,600	4.3
3	長崎	83,900	3.7
4	茨城	48,500	2.1
	その他	234,000	10.2
	全国計	2,283,000	100.0

(農林水産省 作物統計調査より)

②について、長崎県のじゃがいもの収穫量は、全国第3位であった(令和4年)。第1位の北海道は全国生産の79.7%をしめていた(令和4年)。そこで、全国一の収穫量の北海道の気温と降水量を調べてみるとじゃがいもの栽培に適した10℃～23℃の平均気温は5月から10月の期間であり、北海道のじゃがいもの収穫時期は8月から10月である。

このことから、8月から10月は、北海道のじゃがいもが大量に出荷されるためじゃがいもの値段が下がり、もしこの時期に出荷すれば農家の利益は少なくなると思われる。

北海道(帯広) 気温と降水量(令和4年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(℃)	-6.5	-4.7	1.2	8.3	12.9	15.9	21.2	20.5	17.9	10.8	4.9	-3.4
積算降水量(mm)	75.5	19.5	50.0	2.0	59.5	110.0	156.5	265.5	72.0	93.5	21.0	86.5

(気象庁 気象統計資料より)

このような調査の結果から、じゃがいもが8月から10月に島原半島で収穫されない原因は、じゃがいもが冷涼な気候に適した作物で、8月から10月はじゃがいもにとって暑すぎて生育に適さないことと、北海道の収穫時期が8月から10月であるためじゃがいもの値段が下がることがわかった。

〈じゃがいもの栽培方法〉

○トンネル栽培…ビニールやポリエチレンのフィルムを小型のトンネル状に覆うことにより、霜による被害を防ぎ寒い時期に育てることができる。

○マルチ栽培…ポリエチレンのフィルムで土の表面を直接覆い、保温効果により寒い時期の発芽を助けるとともに除草の手間を省くことができる。

秋作では抑制栽培(収穫の時期を遅らせる)、春作では促成栽培(収穫の時期を早める)として用いられる。



じゃがいものマルチ栽培

(提供:長崎県)

長崎県央の発達に高速道路や空港は欠かすことができないものなんだね。

このようにして各地の消費者に届くんだね。

みんなで考えてみよう!
五島の漁業について調べてみよう。

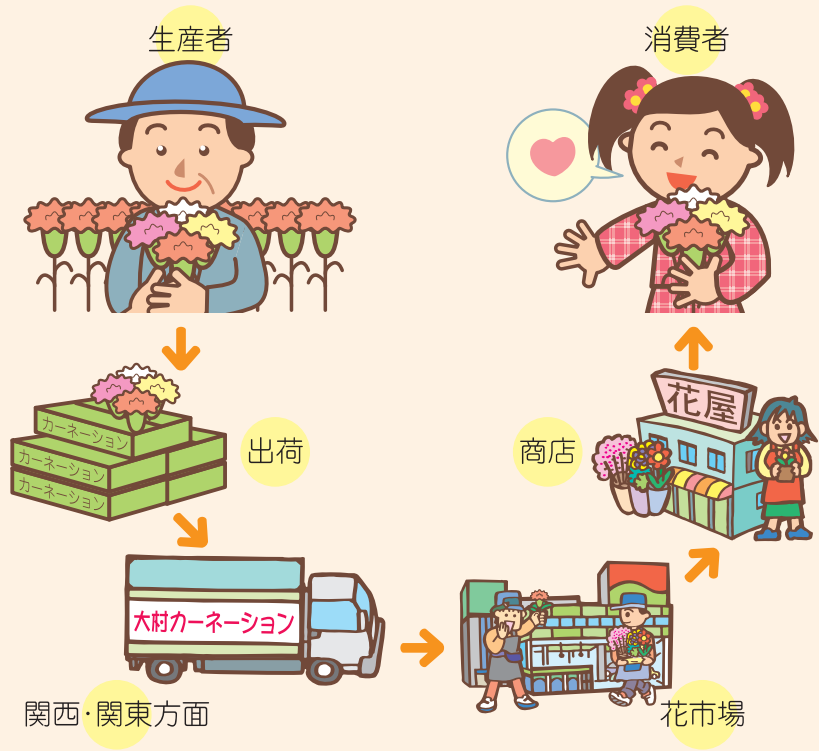
地区の人々は、カーネーションの輸送をジェット機からトラックへきりかえることにした。トラック輸送は、輸送費が安く、積みかえの必要もない。また、保冷車も利用でき、花のいたみが少ないという利点がある。



福重地区のカーネーション団地

(提供:長崎県)

現在では、夏場の生産が少なかったアスパラガスやいちじくなどの出荷も可能となり、新しい産地づくりが進められている。



3 養殖の盛んな町

五島列島福江島の北東部にある奥浦地区や南西部の玉之浦町、また奈留島においては、クロマグロの養殖が盛んに行われている。この地域における養殖業をさらに発展させる可能性を秘めた施設が、玉之浦町荒川地区に誕生した『ツナドリーム五島』と『ツナドリーム五島種苗センター』である。この施設では、クロマグロ資源の減少が懸念されるなか、豊田通商という会社と、世界で初めて完全養殖技術を成功させた近畿大学が連携して、クロマグロの完全養殖に取り

MEMO

組んでいる。完全養殖とは人工ふ化から育てた成魚が産卵し、その卵を再び人工ふ化させることで、天然の卵や幼魚に頼ることのない養殖である。



『ツナドリーム五島種苗センター』では、陸上水槽で、養殖クロマグロの卵をふ化させて稚魚

まで育て上げる取組が行われている。上の図は、卵から稚魚になるまでの様子を表したものである。

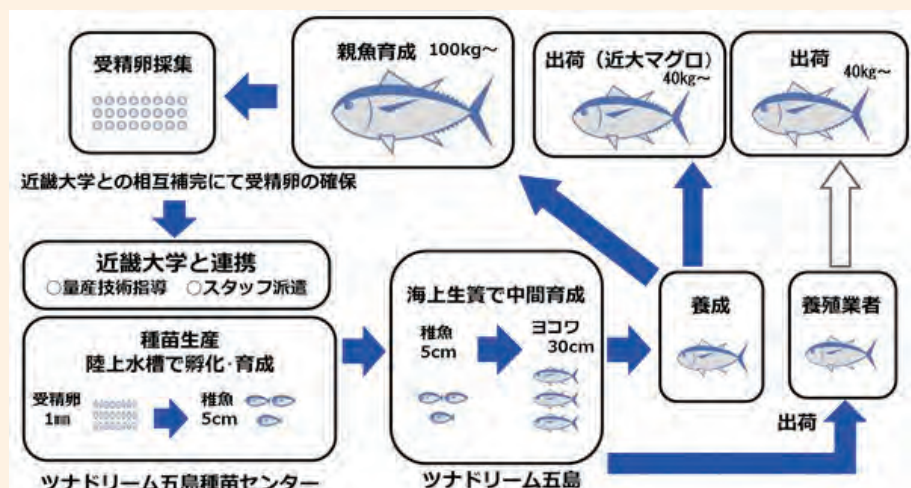
『ツナドリーム五島種苗センター』で育った稚魚は、施設から船で10分ほどの距離に位置する『ツナドリーム五島』の海上いけすへ送られる。そこで、体長30cmのヨコワと呼ばれる幼魚まで育てられ、日本全国の養殖業者に出荷される。その後、それぞれの養殖業者によって約40kg以上の成魚まで育てられ、私たちの食卓に届くのである。



『ツナドリーム五島』における幼魚への餌やり (提供:ツナドリーム五島)

また、『ツナドリーム五島』では幼魚の一部を継続して育成し、成魚「近大マグロ」を出荷している。

親魚として育成し、産卵した卵を『ツナドリーム五島種苗センター』で育てるなど、五島でクロマグロの完全養殖サイクルを回している。



クロマグロの完全養殖サイクル (提供:ツナドリーム五島)

MEMO

● 「ふるさと長崎県」 にでてくる第一次産業

水産業について…… P. 3～4

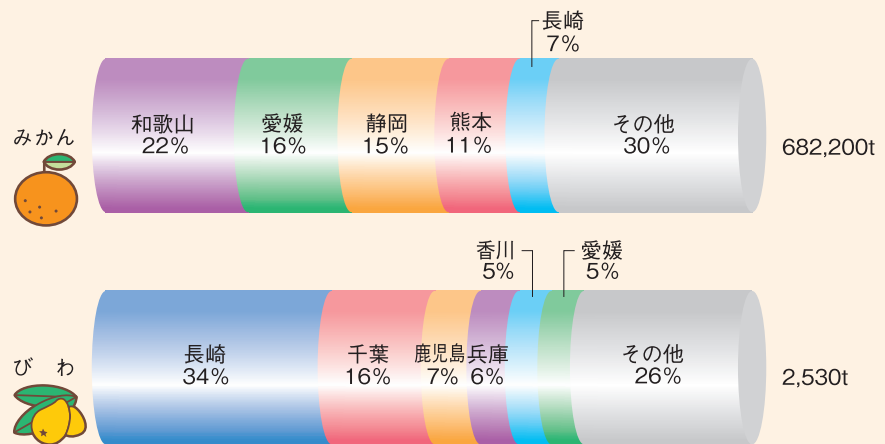
- 沖合漁業の基地 ○ 大村湾や浅茅湾の真珠の養殖
- 有明海沿岸ののり・わかめの養殖など
- 壱岐の水産業 いか・ぶりなど (P. 23)
- 対馬の水産業 あなご (P. 25)

農業について

- 諫早平野……長崎県第一の穀倉地帯 (P. 10)
- 東彼杵町の茶 (P. 17)
- 松浦市・佐世保市・佐々町のメロン・いちごなど (P. 19)
- 壱岐の米・葉たばこ (P. 22)
- 対馬のしいたけ (P. 26)

● 参考資料

みかんとびわの収穫量 (令和4年)



(農林水産省 農林水産統計より)

● すごいぞ！ 長崎県の農業 ●

離島や半島が多い長崎県にとって農業は、地域活性化や雇用の場の確保などからも重要な役割を果たす基幹産業です。

本県の農業は、傾斜が急などの不利な地形条件であるにもかかわらず、令和2年の本県の農業産出額は1,491億円(全国21位)と10年前から約100億円増加して全国順位も1位上がっており、生産農業所得においても593億円(全国22位)と、10年前の約1.5倍に増加して全国順位も6位上がっています。

ふるさと長崎県の農業への「夢・憧れ・志」

農業が盛んになって子供たちが増えている地域

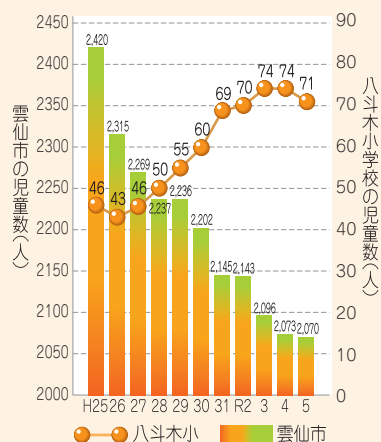


「八斗木白葱」



収穫期を迎えたねぎ畑
(提供:県農村整備課)

雲仙市の八斗木地区は、H23～H29年区画整理と畑地かんがい整備と収穫機械導入により、特産品である白ねぎの生産コストを低減し、農家の収入も大きく増えた。このことにより、農家のあと継ぎが増え、地域の小学校の児童数も増加し、地域の活性化に貢献している。



日本一のみかんの産地



佐世保市のみかん産地の皆さん (提供:県農産園芸課)



佐世保市で栽培されている「させぼ温州」

長崎県で生産される温州みかんは、市場や消費者の評価が高く、28年、30年は販売単価が日本一となった。その原動力は、土壌に雨水が入らないようにシートで覆い、甘くておいしいみかんをつくる技術である。

この栽培方法をいち早く取り入れ、産地に拡大したJAながさき西海させぼ地区かんきつ部会は、第55回農林水産祭で天皇杯を受賞した。また、ここで発見された「させぼ温州」の中から糖度14度以上で食味、外観に優れた果実は「出島の華」として出荷され、全国トップレベルの販売価格で取引されている。

増えています。たくましい新規就農者^{しゅうのう}*



就農希望者の研修風景



就農希望者の研修風景 (提供:県農業経営課)

※新規就農者とは…新たに農業をはじめようとする人のこと

長崎県では新たに農業を始める人を増やすため、就農の相談から就農に必要な農地や機械などの手当てなど切れ目ない支援を行っている。農業の経験がない場合でも、農業経営や栽培技術など就農に必要な幅広い知識を習得できる研修システムも構築しているので、農家のあと継ぎに限らず、農家出身者以外や県外からの移住も増加している。